

説教 『手や足がある霊の体』 山本 護牧師
聖書 ヨブ記 17:5~8/ルカによる福音書 24:36~43

二人の弟子はイエスの運動に挫折しての帰郷した(ルカ 24:13)。イエスの出来事が過去形で語られるところが彼らの、うしろむき姿勢を表している(24:19~24)。そんな彼らに聖晩餐を暗示するパンが与えられると(24:30)、「二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:31)」。こうして同宿した人物がイエスだと気づかされる。また分かった途端に見えなくなるところも興味深い。二人の弟子はエルサレムの使徒の許へ戻り(24:33)、イエスの復活を確認し合った(24:34~35)。

十一使徒と仲間たち(24:33)、そして二人の弟子が復活したイエスのことを語り合っている場にイエス御自身が現れる(24:36)。すると「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った(24:37)」。復活が「分かって(24:31)」も心にストーンと納まったわけではない。現実とはそういうものであろう。うろたえ疑う弟子に(24:38)、イエスは告げる。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉や骨もないが、あなたがたに見える通り、わたしにはそれがある(24:39)」。

復活が、直球でずばりと語られている。身体なき亡霊としてではなく、手足があり触れることのできる「まさしくわたし(24:39)」として甦る。体を伴う復活など、承服しがたいだろう。「肉体が減びても霊魂は永遠」というのなら納得しやすい。それが地中海世界一般の観念であり、現代日本の観念でもある。私たちはあらかじめ観念を抱いている。だが復活の出来事を、承服しやすいこちら側の観念に引き寄せるのではなく、馴染んでいる観念を手放して、私たちが復活の真実に近づかねばならぬ。

体の復活とはどういうものか。「自然の体が蒔かれて、霊の体が復活する。自然の体があるのだから、霊の体もある(1コリント 15:44)」。復活するのは「霊の体」だと。「最初の人(自然の体)は土ででき、地に属する者であり、第二の人(霊の体)は天に属する者(15:47)」。地に属するのがアダムで、天に属するのがキリスト。そして、まさに私たちが、「土からできたその人(アダム)の似姿となっているように、天に属するその人(キリスト)の似姿になる(15:49)」のだと。つまり復活は、私たち自身のことでもある。

「霊魂」と「霊の体」では何が違うのか。霊魂は宇宙生命に吸収されて固有の姿を失うが、霊の体には手や足があって他と混じり合うことはない。ゆえにイエスは、復活後もまさしくイエスであり、私たちも私たち自身として復活する(ルカ 24:39)。イエスが焼き魚を食べる場面は(24:43)、復活の確実性を強調する。その反面、復活の体に触れたとしても、人間は「喜びのあまりまだ信じられず、不思議がって(24:41)」しまう。こうした混乱や錯綜があつてこそ、未来を拓く「喜び」が生ずる。

「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者(1コリント 15:19)」。苦難に陥る者はつぶやく。「目は苦悩にかすみ、手足はどれも影のようだ(ヨブ 17:7)」。復活の手や足が影のようであるならば、私たちの信仰は虚しい(1コリント 15:14)。私は、手や足があるまさしく私(ルカ 24:39)という「霊の体」で復活する。霊魂が宇宙に吸収されたり、他者に引き継がれる輪廻ではない。永遠の命とは、死の支配を受けぬ「霊の体なる私」であり続けること。



【おまけのひとこと】

この声は身体の形状によるもの 思考や感じ方もこの身体で整えられる 人間としての差異はない ただ形状の違いと 似たり寄つたりの個人史の微妙な位相が 各人たらしめ 復活後もそれは続く